



こんな映画を観てきた

旅情

1968 米

監督: デビッド・リーン
★キャサリン・ヘプバーン
★ロッサノ・ブラッツィ
ヴェネツィア・サンタルチア駅。ヴァポレット(水上バス)から降りるとすぐにプラットホーム。映画では、見送られながら“日常”に戻って行くのだが、とにかく、手を振りつつエンディング…

昭和の“沁みる”唄

東京

作詞・曲 森田 貢

唄: マイペース
最終電車で 君にさよなら
いつまた逢えるときいた君の言葉が
走馬灯のように めぐりながら
僕の心に火をともし
何も思わずに 電車で飛び乗り
君の東京へ東京へと出かけました
いつもいつでも夢と希望をもって
君は東京で 生きていました
東京へはもう何度も 行きましたね
君の住む美し都
東京へはもう何度も行きましたね
君が咲く花の都

10.July.2021

Vol.26

お楽しみはこれからだ 7月は『波斯菊 (はるしやぎく)』

YAH!

ヤー! YOU AIN'T HEARD NOTHIN' YET!

『旅情』 こんな映画を観てきたー(1955英/SUMMERTIME)

ジェイン(キャサリン・ヘプバーン、38歳…この年齢もまた物語展開の重要な要素だった)は、欧州見物の夢を実現し、ヴェニスにやって来た。一人で見物に出かけたサンマルコ広場の喫茶店で中年の男(ロッサノ・ブラッツィ)の視線に気付き、あわててそこを去った。

…

ヴェネチア・サンタルチア駅、ほんとうに海のうえだ。ヴェネチア・メストル駅からサンタルチ

ア駅まで5分少々、線路と道路だけの海の回廊。街全体が冗談でなく今にも沈んでしまおう。

此処には車は走っていない。狭い路地と網目のような大小の運河、従って船か歩きだけが移動の手段で、迷路のような路地を縫うように進むと、広くて大きな教会と広場に出る。石畳にテーブルと椅子が整然と並べられ、その一角では夕方からの演奏の準備が進行中だ。

正直者が馬鹿を見る…それでもいいが

コロナ、オリンピック、選挙(東京都)で、また賑やかなばかりで、中身の無いむなしだけの時が移っていく。報道から流れ来るものは何もかもが矛盾だらけ、“上、からのプレッシャーは行儀の良い者のみにしかかり、そうでない者はどこ吹く風ということになる。するとそれまで行儀の良かった者たちが疲れ切って、楽な方にその考えも流れゆく、よって、世は無秩序状態に陥り、とりかえしのつかない出口が待っている。それぞれの事情やら都合が優先し、人は選挙に行かず、もって、低い投票率で、投票した人の意志というより行かなかった人たちの“意志、が反映された

結果なのではないか。そうした“結果、を都合よく解釈し、支持が高いとか、勝手な解釈を披瀝する薄っぺらぶり、これで、誰が誰のいう事を信じ、従うというのか、対応としては、つまり諦めか無視か…とうことになって、正直者だろうが、そうでなからうが答えは“同じ、なのだ。せめて基本的な権利ぐらいは行使しようという程度の事しか言えないが、“軽んじない、”、“逃げない、”、“へたな嘘はつかない、”、くらの意識が常識として通用する社会であってほしいと思うのみである。